

〈 創作を柱にした指導 〉
高等学校 音楽Ⅱ（事例9）

1 題材名 「様々なリズムを表現しよう」

2 題材について

本題材は「音楽Ⅰ」でのリズム学習を経て、学習指導要領「音楽Ⅱ」の内容のうち、「A表現（2）器楽」の「イ視奏力の伸長」、「ウ曲の構成及び曲想の把握と個性豊かな表現」「エ重奏・合奏における豊かな表現」「A表現（3）創作」の「エいろいろな音素材を生かした創作」を指導する事例である。

3 題材の目標

- (1)様々なリズムパターンや曲の形式を理解し、それらを用いてリズムアンサンブルの創作ができる。
- (2)いろいろな打音を味わいながら他の生徒とアンサンブルをし、音楽的表現を工夫することができる。
- (3)創作した楽曲の楽譜を作成することができる。

4 教材

「音楽Ⅰ」の既習課題
①リズム・ムービング 柳沼輝子著 より NO.1～NO.10 2重奏No.59 No.60 No.61 No.62
②ORFF-SCHULWERK C, ORFF G, KEETMAN共著 より 「Rhythmen uber ostinater Begleitung」
「Rhythmische Rondospiele」

教材観
既習曲について
①ソロ作品と二重奏（基本的な音符の反復練習）
②易しいリズム小曲で、様々なリズムパターン、構成、形式等を学習することができる。

5 題材の評価規準 （「A表現」）

	観点1 関心・意欲・態度	観点2 芸術的な感受や表現の工夫	観点3 創造的な表現の技能
題材 の 評価 規 準	・リズム、フレーズ、構成等に関心をもち主体的に創作している。 ・創作した楽曲の楽譜を作成して完成させる。 ・リズムの融合と均衡や全体としての調和に関心をもち、表現する喜びを味わおうとする。	・リズムアンサンブル楽曲としての効果的な表現を工夫している。 ・リズム、フレーズ、構成等を把握し、様々な表現を工夫している。 ・リズムの融合と均衡や、全体としての調和を考え、表現を工夫している。	・創作したリズムアンサンブルを様々な演奏法で表現する技能を身に付けている。 ・リズムの融合と均衡を図り、全体として調和のとれた表現をする技能を身に付けている。
学習活動 に お け る 評 価 規 準	①創作活動に主体的に取り組んでいる。 ②楽譜作成に主体的に取り組んでいる。 ③リズムアンサンブルの演奏に意欲的に取り組んでいる。	①リズムパターンを理解し、工夫して楽曲に用いている。 ②効果的なアンサンブルを工夫している。 ③楽曲の構成・形式を理解して創作をしている。 ④いろいろな音素材を使って表現を工夫している	①グループで一体感のある演奏ができる。 ②いろいろな音素材を使って効果的な演奏をすることができる。

6 指導と評価の計画（8時間扱い）

ねらい・学習活動	評価規準との関連	評価方法	学習活動活性化への視点（指導上の留意点）
＜第1次＞ グループ毎に様々なリズムパターンを出し合う。（1時間）			
・グループで既習曲を復習する。 ・リズムパターンを出し合い、短いフレーズを創作する。 ・創作したリズムを楽譜で記録	観点2－① 観点1－②	観察	・既習曲の特徴を解説し、参考にできるポイントを提示する。 ・活発に意見が出せるように、始めは教師がパターンを提示しておき、それを変化させてリズムを創作する。 ・次回のために記録を残しておく。

しておく。	評価の場面Ⅰ cf. 8-(1)		
＜第２次＞ リズムパターンを重ねてアンサンブルにしていく。(3時間)			
・ 創作したフレーズを短いアンサンブルにしていく。 ・ 同時に音の素材を選択する。 ・ 創作したリズムを楽譜で記録しておく。	観点 2－② 2－③ 観点 2－④ 観点 1－②	観察 評価の場面Ⅱ cf. 8-(2)	・ アンサンブルの形式を復習する。 ① SoloとTutti ② 掛け合い ③ 重奏 ④ パートの増減 等々 ・ 一つの素材で様々な音が工夫できることを気付かせる。
＜第３次＞ 全体の構成を考えまとめる。(2時間)			
・ 全体の構成を考えながら、創作した短いアンサンブルをつなぎ合わせていく。 ・ 創作したリズムを楽譜で記録しておく。	観点 2－③ 観点 1－②	観察 評価の場面Ⅲ cf. 8-(3)	・ つなぎ目部分を工夫するようにアドバイス。 ① ブレイク ② 強弱 等々 ・ 曲の形式を考えさせる。
＜第４次＞ 改訂を加えて仕上げる。(2時間)			
・ 通し練習をしながら、楽器の持ち替え・動き等を考慮しながら曲を仕上げていく。 ・ グループ毎に発表して評価し合う。 ・ 作成した楽譜の提出	観点 2－④ 観点 3－①②	観察 演奏 評価カード 評価の場面Ⅳ cf. 8-(4)	・ 動きを入れて、曲に躍動感が出るように考えさせる。 ・ 各グループの工夫してある点を理解する。

7 本時の学習（第３次） 1／2

(1) 目標

楽曲全体の構成を考えて創作ができるようにする。。

(2) 展開

学習活動		○教師の働きかけ ◆評価規準
1 本時の学習の確認をする。	2 楽譜を見て前回までの復習をする。 3 グループごとに曲の素材を組み合わせて完成させていく。	○これからの授業の流れと本時の学習の確認をし、発表に向けて計画的に取り組めるように促す。 ○構成を考えていく際のポイントを既習曲を用いて説明する。 ・ ブレイク ・ 強弱 ・ 繰り返し ・ 形式 ・ 動き・見せ方 ○まとまらないグループにはヒントを与えて支援する。 ◆グループで協力し、主体的に創作している。(観点 1－①) ○個人とグループ全体のバランスを考えて創作しているか、巡回しながら指導する、 ◆様々な形式や構成を用いて創作している。(観点 2－③)
2 楽譜を見て前回までの復習をする。		
3 グループごとに曲の素材を組み合わせて完成させていく。		
4 本時の活動について振り返り、楽譜に加筆する。		○必要に応じて、繰り返し記号や発想記号等を提示し、使用できるように働きかける。 ◆既習の記号を使用し、楽譜を作成する。(観点 1－②) ○本時の講評をし、次回の学習の確認をする。

8 観点別評価の進め方

前述した「6 指導と評価の計画」のうち、表中に示した評価の場面における評価の手順は次のとおりである。

(1) 評価の場面Ⅰ

* この場の学習活動

- ・既習曲を復習する。
- ・リズムパターンを出し合う。
- ・楽譜を作成する。

* 学習活動における具体の評価規準

- ・リズム・テンポを正確に演奏する。
- ・リズムを工夫して変化させている。観点 2－①
- ・楽譜を書くことができる。 観点 1－②

* 評価方法

〈観察〉

- ・模倣ができているか。
- ・リズムを変化できているか
- ・楽譜が書けているか。

* 「十分満足できると判断される」状況(A)と評価する具体例

- ・正確に模倣ができ、より複雑なリズムに変化させることができる。
- ・考えたリズムを正確に楽譜に書くことができる。

* 「努力を要すると判断される」生徒への指導の手だて

- ・テンポをゆっくりし、「タン」や「タタ」等の歌唱を用いて考えさせる。
- ・基本的な音符の説明とパターンの復習

(2) 評価の場面Ⅱ

* この場の学習活動

- ・短いアンサンブルを創作する。
- ・音の素材を選択する。
- ・楽譜を作成する。

* 学習活動における具体の評価規準

- ・リズムアンサンブルを創作する。 観点 2－②
- ・復習した形式を理解し、用いることができる。 観点 2－③
- ・音素材を工夫する。 観点 2－④

* 評価方法

〈観察〉

短いフレーズの創作ができているか。

* 「十分満足できると判断される」状況(A)と評価する具体例

- ・形式を理解し、工夫したリズムフレーズを創作できる。

* 「努力を要すると判断される」生徒への指導の手だて

- ・既習曲を参考に形式を復習する。

(3) 評価の場面Ⅲ

* この場の学習活動

- ・全体の構成を考え、曲をつなげていく。
- ・楽譜を作成する。

* 学習活動における具体の評価規準

- ・様々な形式や構成を用いて、創作できる。 観点 2－③

* 評価方法

〈観察〉

全体の構成を考え、創作ができているか。

- ＊「十分満足できると判断される」状況(A)と評価する具体例
 - ・全体を見ながら曲を構成できる。
- ＊「努力を要すると判断される」生徒への指導の手だて
 - ・様々なパターンを提示し、一緒に演奏を繰り返す。

(4)評価の場面Ⅳ

- ＊この場の学習活動
 - ・曲の仕上げ
 - ・楽譜の作成
 - ・発表
- ＊学習活動における具体の評価規準
 - ・通し練習をして、曲を推敲していく。
 - ・効果的な動きや音色を工夫する。 観点 2－④
 - ・グループ毎に発表をする。 観点 3－①②
- ＊評価方法
 - 〈観察〉
全体の構成を考えながら、楽曲を工夫して推敲しているか。
 - 〈演奏〉
協力し合って楽曲を仕上げ、発表しているか。
 - 〈評価カード〉
他のグループの評価ができているか。
 - 〈楽譜の提出〉
- ＊「十分満足できると判断される」状況(A)と評価する具体例
 - ・協力し合って良い発表をしている。
 - ・他のグループの工夫点等が理解でき、評価できる。
- ＊「努力を要すると判断される」生徒への指導の手だて
 - ・各自の役割を意識させ、頻繁に声をかけて取り組ませる。
 - ・他のグループの良い点を具体的に評価させる。

